

夜込亭主路次へ行燈持迎に出る、路次によるべし、此時待合へ行燈不置、宗室間に去られ候由、中略

夜込初の薄茶の時、手燭出して炭の時先づは出す、仙叟杯は行燈引よせ置被申よし、

夜込炭の時、行燈を引寄る事、極侘たる體成べし、中略

夜込先は冬落葉の跡よしと流芳云、殘月か、又は殘燈を見て可申と申候は、月なき時分か、大雪風雨などの夜宜しからず、延引がよし、

〔茶道望月集 二十二〕一晝の茶事、昔は別に云ごとく、茶事の樂しみ深き故、口切の比は、大かた好士の人は、夜をこめて行迎へて樂みし事なれども、當時は茶事名聞にのみなりて、春夏は打捨置し人も、十月中旬より思ひよりて、口切とて茶事催する事になれり、夫故夜込の仕かた各別の習事になりて、道玄らぬ人はことごとく、敷云なす故、少し心得たる人も、我まりがほに適々夜込の茶事をする人、聞はつりたる仕かたにて、彼世俗の云、耳を取て鼻をかむ様の事を取合て、是こそ夜込夜の會釋習など、初心の輩に云聞す故、常に馴ぬ事故、いか様左様にてこそあるらめと心得たる事はなければども、たまく、夜込の茶に招れ行し輩は、互に其仕かたを隠し合て、打過る事になり來りし故、愈其道せまく成て、たゞ晝の茶事のみ、の様に成ぬ、

〔喫茶指掌編 一〕道安宅へ細川三齋朝の茶に御約束の處、曉七ツ時前に御出有けるに、其儘出合、忝とて先書院へ招入、蒲團を持出、火燧に懸、何も寛々とあしらい、東雲に成てより、數奇をせし、一段と善仕様と稱美有しと云り、

〔茶道早合點 下〕茶の湯の大概

古茶の湯と云は、定りて朝の事なり、丑の中刻より寅卯の刻迄なり、是を朝の茶の湯と云、又夜ごみとも云、又朝ごみとも云、

朝會